

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 19 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720321

研究課題名(和文) 中世エジプトのイスラーム寄進制度に見る黒死病(ペスト)の影響

研究課題名(英文) The Impact of the Black Plague on Medieval Egypt as seen from the Islamic Endowment System

研究代表者

五十嵐 大介 (IGARASHI, DAISUKE)

東京大学・人文社会系研究科・研究員

研究者番号：20508907

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：14世紀後半以後、エジプト・シリアでは、しばしばペストが流行し、多くの犠牲者を出した。かかる危機的状況のもと、ひとびとは盛んに私財をワクフ(イスラームの宗教的寄進制度)として寄進し、様々な宗教施設を建設し、慈善活動を支援した。本研究は、寄進文書を主要な史料として用い、ひとびとがどのような動機・目的で寄進を行っていたか考察し、その死生観の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In the period following the mid-fourteenth century, there were several outbreaks of plague in Egypt and Syria resulting in the death of millions of people. Under these calamitous circumstances, people actively endowed their private property as waqf (Islamic religious endowment) for the purpose of founding various religious institutions and supporting charitable activities. Using the original endowment deeds as the main sources, this research revealed the motives and purposes of people who established waqfs, while providing a glimpse into their thoughts about life and death.

研究分野：中世アラブ・イスラーム史

キーワード：東洋史 西アジア・イスラーム史 黒死病(ペスト) 寄進 マムルーク朝 慈善 中世 エジプト

1. 研究開始当初の背景

(1) 着想に至った背景

14 世紀にユーラシア大陸のほぼ全域を席卷した黒死病(ペスト)は、その高い死亡率から各地で甚大な被害をもたらし、同時に様々な社会的変動を誘発した、世界史的な大事件であった。それはエジプトにおいても例外ではなく、1347-8 年の最初の流行以来、中世の時代を通じてペストは断続的に流行し、猛威をふるった。しかし中世イスラーム史の分野では、それに起因する都市と農村における人口減少と経済的衰退が 15 世紀におけるエジプト・マムルーク朝(1250-1517)衰退の根本原因と見なされてきたものの、この時代に顕著となった政治・経済・文化の多岐にわたる社会的変動について、ペストの流行というファクターと関連づけて実証的に明らかにした研究はほとんどなかった。私はこれまでのマムルーク朝の財政制度とエジプト・シリアの土地制度に関する研究過程で、14 世紀後半以降、イスラーム寄進制度(ワクフ)が発展するとともに寄進地の規模が急速に拡大したことを明らかにしたが、その過程で、その背景にはペスト流行に起因する土地制度や国家体制の変化、さらには人々の死生観の変化が何らかの影響を与えていたのではないかという仮説を持つに至った。

(2) 国内外の関連研究の中での本研究の位置づけ

中東におけるペストを扱った専論としては、Michel W. Dols, *The Black Death in the Middle East* (Princeton, 1974) が、ペストに関する具体的な情報を史料から丹念に抽出し、その伝播ルート、ペストに対する人々の対応、当時の医学やイスラーム法上の見方など幅広く論じており、この分野の第一の研究としてこれまで依拠されてきた。しかしながら出版以降既に 40 年近く経過した今、新発見の史料や最新の研究に基づいた新たな研究が必要である。その中で近年の S. J. Borsch による *The Black Death in Egypt and England: A Comparative Study* (Austin, 2005) をはじめとする一連の研究では、西洋史における黒死病研究の成果を取り入れながら、ペストがエジプト社会にもたらした影響を再考した。しかしながら彼の研究は専ら経済や農業活動に対する影響のみを対象としている。それに対して本研究は、こうした経済面や農業面への影響がもたらした土地制度や財産保有形態の変化、さらには人々の死生観の変化にまで踏み込んで、ペスト時代の社会変動を多面的に明らかにすることを試みる、社会史的な研究として意義深いものである。

また、本研究は政治史や国家制度史の分野にも大きく関係する。マムルーク朝は 1382 年を境として、前半をバフリー・マムルーク朝、後半をチェルケス・マムルーク朝と分けられる。このような政治的移行が起こった 14

世紀後半という時代は、マムルーク朝史において重要なメルクマールであることから、近年は特にこの時代の政治史に関する研究が盛んに進められている(J. Van Steenberghe, *Order out of Chaos*, Leiden, 2007 など)。しかしこれらの研究のほとんどは、軍人支配層内のパワー・ポリティクス分析にとどまっており、それを経済的社会的背景との関わりの中から意味づけるといった視点を欠いている。しかし、ペストはこの時代の社会変動の重要なファクターであり、軍人支配層もまたその影響を受けていた。特にペストによる農村人口の減少が、土地制度、特に国家体制の核であり軍人支配層の経済基盤であったイクター制に与えた影響は、国家体制や支配層の有り様とも深く関わっている。本研究は、ペストによって生じた社会的経済的変動を明らかにすることにより、社会経済史と政治史の間の橋渡しをし、この「変化の時代」の全体像を描くことができる。

2. 研究の目的

ペスト流行以後のエジプト・シリアにおけるイスラーム寄進制度の隆盛とその社会的経済的影響について、以下の二つの視点から考察する。

(1) ペスト流行が与えた社会経済面への影響の考察

ペスト流行時には大勢の人間が死亡したことから、持ち主のいなくなった資産が一度に大量に出回り、取得が容易となったと想定される。このようなペスト流行時の生存者の資産形成については、ヨーロッパ史の研究で指摘されているが、同じ状況下でのエジプトについては明らかでない。15 世紀を通じたアミール(軍団長)層の私的な財力、影響力、パトロナジの拡大が近年指摘されてきているが(A. Levanoni, "The Halqah in the Mamluk Army," *Mamluk Studies Review* 15 (2011) など)、そこには彼らによるこのような形の資産形成が背後にあったのではないかと。また、こうした資産形成がこの時代の寄進制度の発展と寄進地の拡大も可能としたのではないだろうか。以上の仮説のもと、寄進文書からその寄進財産がそもそもどのような経緯で寄進者の手に入ったかという資産の形成過程を検討する。

(2) ペスト流行が与えたひとびとの死生観への影響の考察

14 世紀中頃~15 世紀のエジプトは、およそ 8~9 年に一度の割合でペストの流行に見舞われた。このように死が身近となった当時の社会状況が、人々の死生観に何らかの影響を与えたことは想像に難くない。この時代に顕著なイスラーム寄進制度の発展も、こうした社会状況のもとでのひとびとの善行意識や死生観の変化があったと想定される。寄進文書の分析から、この時代の寄進のあり方、すなわち寄進の対象とされた宗教・慈善施設

ノ活動など、寄進の形態に具体的に何らかの変化が見られるのか、またペスト流行の最中に行われた寄進には、いかなる目的・意図があったのか、といった問題を寄進設定時の規定の分析と年代記などの叙述史料との比較から検討する。それを通じ、この時代に入々が生と死といかに向き合い、その中で寄進制度がいかなる役割を果たしていたかを探る。

3. 研究の方法

(1) 史料

寄進文書：エジプトの国立文書館と宗教財産省文書局に所蔵されるマムルーク朝時代の寄進文書、およびシカゴ大学中東文献センター所蔵のマイクロフィルム化された寄進文書を主な史料とした。未校訂のオリジナルの文書を中心に検討したが、校訂・出版された寄進文書も併せ用いた。

土地台帳：トルコ総理府文書館に所蔵される、16世紀オスマン朝時代のダマスカスで作成された未校訂の寄進調査台帳(Tahrir Tapu Defteri)、校訂・出版されたシリア・パレスティナの土地台帳、寄進調査台帳から、マムルーク朝時代のワクフの情報を抽出し検討した。

叙述史料：エジプト・シリア・メッカ・メディナを対象に書かれた同時代の主要な年代記、地誌、人名録により、ペストの流行状況を中心とする社会的背景、および寄進者や寄進対象施設に関わる関連情報を抽出し、の情報と比較検討した。

碑文：現存する宗教施設のアラビア語碑文を集めた碑文集 Max Van Berchem, *Materiaux pour un Corpus inscriptionum arabicarum, premiere partie, Egypt (1903)* を用い、研究対象とした各種宗教施設に刻まれた碑文を考察した。

(2) 分析方法

複数の寄進文書から、寄進財の種類と入手時期・入手経路、寄進の時期、寄進対象とされる宗教施設や慈善事業の種類や規模、寄進時に設定された各種の規定、寄進目的についての文言などの情報を抽出、比較検討し、共通性と特殊性を考察した。

年代記史料と先行研究をもとに、ペストが流行した場所と時期を年表形式に図表化し、主要な宗教施設の建設と寄進の実施時期、および寄進財の入手時期と比較して関連性の有無を考察した。

マムルークの高級武官 Qijmas al-Ishaqi と、有力官僚 Zayn al-Din `Abd al-Basit の寄進文書を詳細に分析するとともに、各々のキャリアを人名録や年代記から再構成し、彼らがどのような個人的・政治的・社会的背景

のもと、いつどのような形の寄進を行っていたか、その動機・目的はどのようなものであったか検討し、個別具体的な寄進のケーススタディーを実施した。

4. 研究成果

14世紀半ばにエジプト・シリアを襲ったペストは、その後風土病としてこの地に根を下ろし、15世紀を通じて約9年に一度の割合で大規模な流行を引き起こした。寄進制度の隆盛はまさにこのような時代背景のもと起こったのだが、大規模な「死」が常に身近にあるという状況が、人々の死生観に変化をもたらし、私財を費やして善行を行うことが流行した、と考えるのは妥当であろう。そして実際に、ペストの流行時に寄進や寄進を伴う宗教施設の建設/開設が行われた事例は史料から多数確認できた。しかし、文書中に言及される寄進動機や施設の碑文、あるいは同時代の年代記作家たちの叙述からは、ワクフの寄進や宗教施設の建設に、ペストの終焉を神に祈るための贖罪行為、あるいはペスト終焉を祝う都市の記念碑的モニュメントといった(中世ヨーロッパで見られるような)機能を見ることはできない。むしろ、寄進者個人の来世での救済を目的とした、私的な性格が見て取れる。ただし、こうした寄進文書に記される寄進者の動機は、「神の報酬」を求める抽象的なものにとどまり、ペスト流行以前のものとは大きな違いは見出せない。寄進文書の様式という観点からは、ペスト流行が寄進制度に与えた影響を見ることはできないことが明らかになった。

一方で、個別の寄進事例を仔細に検討していく中で、ペストの流行による近親者の死が、寄進の動機になったと見られる複数の事例が明らかになった。アミール(軍団長)キジュマースは1470年、それまで自分自身を受益対象として設定していた資産保全用の寄進について、寄進時の規定を変更し、自身の死後の埋葬地の管理や死者の為のコーラン読誦を目的としたワクフを新たに寄進したが、その背景には、当時エジプトにおいておよそ九年ぶりにペストが大流行し、おそらく自身の二人の幼少の息子も命を落としたことがあった。また有力官僚アブドゥルバースイトも、1430年に長子をペストで失い、直後に家族の墓廟を建設し、墓でのコーラン読誦などを規定したワクフを寄進した。その直後に彼はイスラーム第三の聖地であるエルサレムへ参詣に赴き、同地においてもマドラサ(学院)を建設し、ワクフを寄進している。

また、両者の行った複数のワクフ寄進の形態とその当時の状況とを比較検証していく中で、ペストとの関連のみならず、多様な動機・目的が寄進の背景に見られることを明らかにした。彼らは自身の資産の保全手段として、地位の向上に伴う権威と威信の表現手段として、出身地に宗教施設を建立し「故郷に錦を飾る」手段として、聖地においてマムル

ーク朝の支配権を示す政治的手段として、地方総督として任地の都市開発を進める手段として、自身が建設した宗教施設の官職任命を通じた人的コネクションの形成・強化を目的として、家族に対する資産の譲渡手段として等々、寄進制度をその時々状況に応じ、戦略的に用いていた。このように個別の事例を寄進者の個人的状況とその時代の社会的状況の双方から深く掘り下げて検証することで、当事者の視点に即した具体的な姿を描き出すことを可能にした。イスラームの宗教的寄進制度であるワクフ制度は、前近代のイスラーム世界各地で発展し、経済・教育・社会生活・文化等あらゆる分野に大きな影響を与えた重要なシステムである。本研究で試みた手法とその成果は、マムルーク朝時代エジプト・シリアを対象としたものでありながら、ワクフの実態についての知見を深め、今後ワクフ制度全体としての共通性と各々の時代・地域の個性の双方に目配りした総合的なワクフ研究に進むための視座と参照軸を提供するものとなる。

一方で、ペスト流行による社会経済的影響、すなわちペストの流行により大勢の死者を出したことが、結果として生き残った者たちに富の集中を生んだという、中世ヨーロッパにおいて指摘されてきたような変化は、しかしながら、マムルーク朝時代の寄進文書からは見ることができなかった。多くの文書では、寄進財の入手経路に関する情報が、研究開始当初の想定よりもはるかに少なく、(ペストによる死者の資産を手に入れたかなど)個別具体的な入手経路についてはほとんど情報を得られなかったためである。この問題については、史料上の制約もあり状況証拠を積み重ねた推論の枠に留まった。他方で、この時代の地方農村ではムタダリクと呼ばれる在郷徴税請負人が台頭してくることが本研究の過程で見えてきた。社会経済的な問題については、ワクフとして寄進された農地＝ワクフ地の拡大という土地制度の変化に伴う農村社会や税制度の変化について考察することが、何らかの突破口になるかもしれないと期待している。

以上の研究成果は、日本語で発表すること以上に、海外に発信することを重視した。日本語の成果は共著1冊、口頭発表1回なのに対し、英語のものは論文1本、単著2冊、共著1冊、口頭発表(招待講演)1回にのぼる。本研究は海外の研究者からも賞賛され、世界のマムルーク朝研究にインパクトを与えることができた。

最後に、今後の課題と展望を述べる。本研究では、おもにペストとの関連から寄進について考察したが、この時代のエジプト・シリア社会はペストのほかにも度重なる天候不順、渇水、飢饉といった自然災害に見舞われた。その上、頻発する軍人たちの派閥抗争や、ティムール朝やオスマン朝といった外敵との戦争など、政治的にも混乱の様相を深めて

いく。このような全体的な時代状況に鑑みれば、ペストのみに焦点を当てるのではなく、恒常的な「危機の時代」に生きる人々の死生観や信仰のかたち、経済活動、生存戦略などの視点から、寄進について考察していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Daisuke Igarashi, Madrasahs, Their Shaykhs, and the Civilian Founder: The Basitiyah Madrasahs in the Mamluk Era, *Orient*, vol. 48, 2013, pp.79-94, 査読あり
https://www.jstage.jst.go.jp/article/orient/48/0/48_79/_article

[学会発表](計2件)

Daisuke Igarashi, Land Tenure and Mamluk Waqfs, 15th Ulrich Haarmann Memorial Lecture, 2013年12月16日, Bonn (Germany)

五十嵐大介、後期マムルーク朝の文官と慈善活動: Zayn al-Din `Abd al-Basit の事例、日本オリエント学会第54回大会、2012年11月25日、東海大学湘南キャンパス(神奈川県・平塚市)

[図書](計4件)

U. Vermeulen, K. D' hulster, and J. Van Steenberghe (eds.), P.-V. Claverie, N. Coureas, J.-Ch. Ducene, H. Hanisch, D. Igarashi, G. Lelli, Y. Lev, P. Moukarzel, D. Nicolle, C. Onimus, M. Piana, S. Pradines, B. Shoshan, N. Vanthieghem, Th.M. Wijntjes, J. Yeshaya, K. Yosef, and M. Zouihal, Peeters (Leuven, Belgium), *Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid, and Mamluk Eras VIII*, 2016, 印刷中

Daisuke Igarashi, Middle East Documentation Center, University of Chicago (Chicago, USA), *Land Tenure, Fiscal Policy, and Imperial Power in Medieval Syro-Egypt*, 2015, 264.

Igarashi Daisuke, EB-Verlag (Berlin, Germany), *Land Tenure and Mamluk Waqfs*, 2014, 57.

中央大学人文科学研究所編、阿部幸信、角山典幸、妹尾達彦、西村陽子、川越泰博、新免康、松田俊道、五十嵐大介、船橋倫子、中央大学出版部、*アフロ・ユーラシア大陸の都市と国家*、2014、567(489-537)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

五十嵐 大介 (IGARASHI , Daisuke)
東京大学・人文社会系研究科・研究員
研究者番号：20508907